

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会 編集人 同窓会会報編集委員会 委員長 大曾根宏亮 印刷 常陽新聞新社



土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠馬 作曲

一、沃野一望数百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水

二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の氣を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の気魄あり

四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

目次

- 2面 会長あいさつ
- 2面 学校長あいさつ
- 3面 平成18年度総会報告
- 3面 卒業60周年記念同窓会
- 3面 卒業50周年記念同窓会
- 4面 卒業40周年記念同窓会
- 4面 卒業25周年記念同窓会
- 5面 恩師を訪ねて
- 6面 卒業生レポート
- 7面 支部だより
- 8面 お知らせ
- 9面 母校だより
- 10面 職員室だより・部活動だより
- 11面 進路状況報告
- 12面 平成17年度決算報告等

同窓会会長あいさつ

「正直に徹する」

会長 幡谷 祐一



正直は、最も貴重な財産のひとつであります。正直とは、人との付き合いにおいて公明正大であるということなのです。

正直は、人生の成功基盤です。人生で成功をおさめるためには、仕事や人間関係で正直でなければなりません。人にウソをつきながら毎日を送るよりも、正直に生きる方がはるかに楽です。多くの人は不誠実な行動によって自分の人生を台なしにしています。

「正直は最善の策である」ということわざがあります。これは真理です。正直であれば成功をおさめることができますが、正直でなければできません。

他人が正直かどうか、どうすればわかるのでしょうか。不正な手

段で利益を得るといふ誘惑に屈せず、いかなる状況下でも道徳的に正しいことをするかどうかを見ればいいのです。

不道徳な行動をすると、それは不名誉や侮辱という形で必ず自分に返ってきます。常に正直であることを心がけましょう。正直であることを忘れて、自分の評判をおとしめることになりません。古い格言にあるとおり、恥ずべきことがなければ、弁解する必要はありません。正直とは、あらゆる状況下で自制心を働かせることです。

人生の成功は知性だけによるものではありません。それは道徳的な資質にも左右されます。人との付き合いの中で、正直で信頼される人間であることを心がけましょう。そういう素晴らしい資質を身につければ、人びとはあなたを信頼します。信頼されるかどうか、人生の成功の大きなカギになるのです。

多くの人は、不誠実な行動によって自分の人生を台なしにしている。

「同窓会会報に寄せて」

学校長 村松 輝美



秋も深まり、旧本館前の銀杏も黄金色の輝きを増しています。進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、日頃は本校の教育活動に深いご理解と温かいご支援をいただいておりますことに、心から御礼を申し上げます。

ここで本校の近況につきましてご報告をさせていただきます。

第一に、入試状況でございますが今年度もしっかりした実績をあげてくれました。ただ、若干の物足りなさはあるような気がいたします。生徒達は、東大・京大・東工大・一橋大・国立医学部のいわゆる超難関国立大を第一志望とし、私立大なら早慶という構図が根強く、難関校の筑波大などへは合格者層での希望が減っているというのが現状であります。ご承知のように超難関国立大は全国区の戦いであり合格は大変困難であります。それを考えると、もっと早くから取りかかる必要があるのですが、次に述べるようなやむを得

ぬ状況もあり、本気になるのは三年生の六月中旬からという生徒も多く、時として切歯扼腕という心境に陥っております。

第二に、生徒のクラブ活動についてですが、相変わらず自主的活動が活発に行われており、本校の三大行事である六月の「一高祭」、九月の「一高オリンピック」、十月の「歩く会」などでは、生徒が自主的に実行委員会を組織し、企画・立案の段階から運営・実施、反省・評価に至るまでを取り組んでおります。今年度の「一高祭」は、「源々あなたのルーツは何ですか?」というテーマで行われ、生徒それぞれが個性を発揮して盛大に開催されました。現在の一高生を見るにはこれが一番かと思えます。毎年夏に先駆けて催される一高祭を是非一度ご覧ください。

また部活動への参加者も非常に多く約八割の生徒が加入しています。吹奏楽・合唱・弦楽の音楽三部には合わせて百四十名、硬式野球・サッカー・バスケットはそれぞれ五十名を超えた部員を抱えて活動しています。この背景には保護者の方のいわゆる「勉強だけでは」という意識があつて、小さい頃からの習い事や、スポーツ少年団活動の延長線に部活動があるのではないかと思えます。

最後に、これからの本校の課題等についてですが、ご承知のようにつくばエクスペディアが開通して

守谷・つくば方面から東京までの距離が圧倒的に近くなりました。都内の有名私立高校ばかりでなく有名私立中学校への入学者が若干増えているとの噂も耳にします。そういう中で、知徳体のバランスのとれた人間として生徒たちを育て、送り出しながら、どのように現在の進学実績を維持、発展させていくかと言ふことに尽きるかと思えます。幸いにして本校の生徒は、主体的で、自らの判断で行動できる素質を有しています。要は、その素質をいかに磨くかであり、妥協を許さずにより高い知性と徳性を備える切磋琢磨の機会を造り出していけるかと言ふことになりまふ。「頭鍛え、体鍛え、心鍛え」を合い言葉に、努力して参りたいと思ひます。

また、中学生向けの学校案内パンフレットのなかで、本校の目指す教育を「BE A CREATOR OF THE FUTURE」(未来への創造者たれ)とメッセージ化し、「高い理想と自己実現」を目指し、「自主・独立の気風」を継承しつつ、「百年の歴史と伝統」を有する「未来を拓く、若人の学舎」であると本校を位置づけ、本校のブランドスローガンを「FLAGSHIP HIGH SCHOOL」として意識の高揚を図っています。

以上が主な学校の様子であります。本校の発展は、時代を超えて本校のランドマークであります旧本館とともに、歩んでこられた同窓会の皆様方が築きあげられたものであり、心から敬意を表しますとともに、今後ともご指導ご支援をお願い申し上げます。

平成十八年度

進修同窓会総会開かれる

去る四月九日(日)、平成十八年度定期総会が、母校体育館において会員約三五〇余名の出席のもと盛大に開催されました。

桜の開花は遅れましたが好天に恵まれ、開会前の旧本館玄関前庭は、祝賀各回の記念撮影などについてにぎわいでした。

総会の幕開けには欠かせない応援指導部のリードと吹奏楽部の演奏による、校歌、応援歌、一高讃歌の斉唱で開会、物故会員への黙祷ののち、幡谷祐一会長、村松輝美校長の挨拶があり、青山和義副会長を議長に議事が進められ、十分な審議を尽くして、次の議案が

可決承認されました。

一 平成十七年度事業報告及び決算報告

二 平成十七年度進修同窓会基金決算報告

三 別途積立金報告

四 平成十八年度事業計画及び予算

五 同窓会役員改選

総会後、卒業周年祝賀式に移りました。本年は、中四十六・四十七回(六十周年)、高八・定六回(五十周年)、高十八回(四十周年)、高三十三・高理十・定三十一回(二十五周年)の方々をお招きいたしました。高九回(来年五十周年)

古德利光氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、高八回卒業青山和義氏より、本年五十周年を迎えられた皆様を代表して謝辞が述べられました。

また、別会場に移動しての祝賀会では、先輩・後輩の、あるいは同窓同士との交歓・交流が、時間を忘れたように続きました。

★同窓会へのご連絡は指定曜日に

会員各位と同窓会との連絡・連携をより緊密にするために、同窓会に専任事務担当者置き、毎週水曜日に一名が一高同窓会室に詰めることになりました。同窓会関係のご連絡・お問い合わせ等がございましたら、この指定曜日をご利用ください。

なお、次年度(十九年四月以降)からは、右の同窓会室に詰める曜日が火曜日に変更になります。



会長あいさつ



応援指導部指揮による校歌斉唱



祝賀会の模様

卒業六十周年記念同窓会

土浦中学四六・四七回卒業同窓会

平成十八年四月九日、土浦一高体育館での卒業六十周年記念を含む進修同窓会総会と、ホテルカンコーでの祝賀会の後、午後四時ごろからホテルマロウド筑波で同窓会総会を開催しました。

出席者は四十七名、高齢になつたにも拘らずほぼ従来どおりであった。総会は石渡久夫君の司会で、代表幹事の挨拶、埜口忠男君の会計報告と型どりの経過の後、植竹正雄君の乾杯の発声で懇親会となった。藤井啓一君や石渡久夫君などの歌も交えて、賑やかに楽しく旧交を暖める時を過ごせたことは幹事として嬉しいことでした。

この懇親会開催のためお骨折りいただいた幹事や出席者の皆様にご感謝すると共に、今後の同窓会運営について、解散を含めて幹事会



一任となったことに責任の重さを感じております。
(代表幹事 井坂 雄)

卒業五十周年記念同窓会

高八回生は、もう戦後ではないと言われ始めた昭和三十一年に卒業して五十年、同窓会本部から祝賀通知を受け、直ちに発起人数名で祝賀同窓会の準備を始めました。

初めに方針として、百名以上の参加者を目標とすること、来賓として三年時に授業を担当された先生方を招待することを決めました。また多方面から検討した結果、開催日時と会場は本部の祝賀会と同一にすることにしました。案内状発送段階では住所確認に苦労しましたが、それでも二百七十七名に送付することができました。出席の返事が百名を超えたときはホッとしましたが、反面、他界と音信不通の同期生が七十名弱いることに愕然としました。

総会当日は、まず正午に旧本館前に集合し、記念撮影をいたしました。続いて新体育館での総会・祝賀式に百二十三名が出席しましたが、総会直前の応援団演技において、女子団員が約半数だったことは、皆、驚いていました。祝賀式では幡谷祐一会長の「百歳宣言」と「皆さんもがんばってほしい」との励ましのご挨拶が印象に残りました。

ホテルに移動しての記念同窓会は、本部の祝賀会と平行して開催されました。そのため、二十名が最初そちらに参加し、後に合流しました。



3面からの続き
我々の祝賀会では、来賓としてご出席の菅沢虎彦、諏訪正次郎、横田尚義、後藤秀雄の各先生から臨時授業や当時の思い出、現在の生活などについての力強いご挨拶がございました。九十一歳の菅沢先生をはじめ、先生方のお元気なお姿を拝見して、大きな生きる力を与えられたように感じました。鹿児島から馳せ参じた細谷彰夫君の乾杯で懇談に入りましたが、初参加者、県外参加者が多かったせいか、久しぶりの再会に至る所で話が弾み、予定時間を大幅にオーバーする賑わいとなりました。最後に校歌を合唱し、再会を誓って閉会しました。最後になりましたが、このような機会を設けていただいたこと心から感謝申し上げます。(青山和義 記)

十八回卒記念同窓会

私達十八回生は、今年卒業四十周年を迎えました。その記念に恒例により、進修同窓会から総会及び祝賀式へのご招待をいただきましました。それを機に総会前日四月八日に自分達の四十周年記念同窓会を「ホテルマロウド筑波」で開催しました。

ここ一年位、同窓生が集まると「四十周年同窓会をやるよ」との話が出、開催当然の機運が盛り上がりつつありました。土浦在住の有志が協議した結果、第一回目と二回目(前回)の各実行委員長であった待田稔雄君及び青木孝之君から準備会の呼び掛けをすることになりました。準備会には、クラス毎に前回の二十五周年の実行委員会に集って貰い、四十周年同窓会の実行委員会の組織を立ち上げました。

前回より十五年が経過しておりましたので、会員住所の確認から始まりましたが、進修同窓会発行の会員名簿が大いに役立ちました。

当日は、八名の恩師の先生方、同窓生一四〇名の出席を得て、委員会の予想を超える盛大な同窓会となりました。翌日の進修同窓会主催による「総会等の式典」にも五十四名もが参加し、久しぶりの母校と対面しました。

高校卒業四十周年は年齢的に、勤めの人には定年後の身の振りかたが、又自営業の人にとっては事業承継問題等、決断の時が迫っており悩ましく年代でもありません。仕事(人生)の上では個人個人の評価もほぼ固まり、先が見えて来て角も取れ、素で居られる心境に



達しつつあります。同時に加えて今後の生き方に新たな不安を感じる頃合でもあります。自身の加齢による健康、家族に高齢者を抱えるの介護、子の巣立ち後の夫婦間の危機など、世間で取りざたされるあらゆる問題が、今全て当てはまるのが我々団塊一期生であります。こんな時期の同窓会であればこそ、多くの同窓生にとって語り応えがあったものと思います。出会った同窓生の誰もが、人生を刻みながら、着実に厳しい壁を乗り越えて「今」あるかに見えます。同窓生の諸君出席有難う。そして実行委員会の皆さんご苦労様。次回十年後、味のある顔付きになってきた誰彼と、また再び逢えることを楽しみにしています。それまで互いに元気で!

(河合 隆)

卒業二十五周年を迎えて

去る四月八日、同窓会総会に先立ち卒業二十五周年を記念して学年同窓会を開きました。我々普三十三回・理十回生としては、卒業以来最初の同窓会になりました。私が母校に勤務している関係で発起人になり、各クラスから約二十名が幹事として集まり企画立案を行いました。住所調査等をしていく過程で数多くの同級生が日本はもとより海外で活躍していると改めて認識したものでした。中にはこの日のために遠くロサンゼルスから駆けつけてくれた仲間もいました。また幹事の予想を遙かに超える百五十名余の同級生と、十名の恩師の先生方において頂き盛会になりましたことをまず報告させていただきます。

当日は、受付をしていますと、いきなり懐かしい顔に出会い思い出話に花が咲くという光景があちこちで見られました。卒業以来初めて出会うという友人も数多く、昔の面影すらなく誰だかわからないという人も見られ受付の段階から大いに盛り上がりました。宴会は、まず幹事を代表してF組の片岡達郎君の高校時代を彷彿とさせる元氣な挨拶から始まり、恩師を代表し学年主任の栗山先生のご挨拶、長壁先生の乾杯の音頭と続きました。その後歓談を挟み、中村先生、松井先生、片岡先生、大崎先生、植木先生、鈴木先生、古森先生、佐藤先生に、我々と過ごした三年間の思い出や近況をお話いただきました。恩師の先生方や仲間たちとの歓談の中で、青春の真つ只中の三年間が鮮やかに甦ってきました。勉強はも



ちろん友人たちと語り合った日々、今でも母校で受け継がれている一高祭、一高オリンピックなどの行事に一生懸命がんばったこと、我々の学年は現在の校舎の建設中に高校時代を過ごし、二年ではプレハブ校舎や美術室等を教室として使っている、木造の文化財校舎でも三学年の一ヶ月だけ使用したことなど、様々のことが思い出されました。予定していた時間はあっという間に過ぎ、最後に元応援指導部の皆さんのご協力を得て全員で校歌を合唱し、会は終了しました。高校時代の多感な時期を過ごした仲間たちとの掛け替えのない時間を共有することが出来、またすぐに同窓会を開きたいという声があちこちで聞かれました。

翌九日には同窓会総会、周年祝賀式・祝賀会が開かれ、周年学年の一つとして招待を受けました。このような機会を設けていただき同窓会本部の方々に深く感謝を申し上げます。また卒業生の一人として微力ながら母校の発展に尽くしていきたいと思っております。(赤田部 清浩)

恩師を訪ねて

⑩

社会 遠藤 俊夫 先生

在職 昭和二十五年九月〜四十二年三月(教諭)
昭和四十九年四月〜五十五年九月(校長)



母校への奉職

いわゆる戦中十八年、大学二年の秋に学徒動員を受け津田沼の戦車隊に入隊。幹部候補生となつて、十九年秋にシンガポールの第七方面軍野戦兵器廠に派遣され、そこで終戦。帰国できたのは二十一年の五月。その後製薬会社に就職したが、家庭の事情で筑波に帰ることになり退社、そして昭和二十五年、社会科教諭として母校奉職の機会を得た。

甲子園初出場

昭和三十二年夏、野球部長として甲子園に出場できたのは忘れ難い思い出だ。野球の経験はなかったが、教員採用と同時に顧問を仰せつかった。これが野球部と浅からぬ縁を結ぶ始まりだ。かけ出しの役目は、主に不足しがちな経費の調達と合宿の泊まり番。若さと地元育ちの土地勘を見込まれた、というところか。のちに「出場当時の苦労話を」と水を向けられたりしたが、苦労と感じたことは格別なかった。当時は

一高野球部が最も脚光を浴びた時代、県南では大将だった。それ以前は水戸一、水戸商などの水戸勢がぬきんでいて、運営も(中央)の水戸中心。高野連に(地方)から役員に出たのはもしかしたらわたしが最初かもしれない。強かったのは甲子園出場の年だけではない。その前年など本校野球部史上最強という人も多い。そのナインの中には、東京六大学やプロ野球で活躍した選手などもある。北関東出場も昭和三十二年が三度目だ。

当時甲子園へは北関東三県から一校。それを開催県の四校、他の二県から二校ずつの八校で争った。この年一高は県大会決勝で水戸商に敗れたが、北関東では緒戦富岡高に競り勝ち、その勢いで次ぎの水戸商にも雪辱、決勝で高崎高を破り、初の甲子園切符を手にした。七時過ぎ土浦駅に凱旋すると火花が打ち上がり、駅頭にあふれんばかりの歓迎の人波、やがてその人波は提灯行列となつて、初出場の喜びをかみしめる選手やわたしたちを一高まで送つてくれた。

甲子園緒戦は紀和代表和歌山商だったが、安藤選手的好打守と五来投手の力投などで完封勝利。無名に近い初出場校が出場四回の名門校に快勝したのだから、ベンチも応援席も湧きに湧いた。今夏も早実の投手が報道をにぎわした。あの年も話題の中心は早実王貞治投手。その王投手と双壁と評判の高かったのが、一高第二戦の相手岐阜商の清沢

花の学年主任

甲子園と並んで思い浮かぶのは、十四回・十七回の二度にわたる、学年主任として生徒諸君を担当できたことだ。本当に気の知れた同僚、言いたいことが言い合える仲間間に恵まれ、我ながら精一杯取り組んだ気がする。特に十七回は「花の十七回」と言われたぐらい進学成績もよく、合格率も七十パーセントを超えた。一方で「家庭学習七時間」が目標に掲げられたりしたことから、生徒側は「きつくやらされた」という印象を持った者も少なくなく、指導面におけるひずみが指摘されたりもした。そうしたことへの反省が、長く続いた能力別編成への見直しにつながっていったように思われる。

一高校長時代

昭和四十九年には校長として再度一高に勤めることになる。そのとき最重点事項として打ち出したのが「授業重視・自習ゼロ」だった。もっともこれはわたしの創案ではない。教員もこれはO.B.として大先輩菅沢虎彦先生(土浦一教頭、海道一校長、中31)以来の一高の

基本線だ。学校だから授業重視は当たり前前。一方自習ゼロはそう簡単にはいかない。出張等で生じた自習を肩代わりすればその教員の授業負担が増える。だが授業の時間一時間は大切にするという姿勢を具体的に生徒に示す意味でも、自習はできるだけ無くしたかった。授業重視と自習ゼロは、ある面で一体だ。

共通一次試験(センターテストの前身)実施を控えた授業重視の気運は一段と高まり、出張の際などの授業振り替えも定着していった。急な事情でその日の朝突然出た自習さえ、係が掲示すると、先を争うように引き取り手が見ついた。この授業補填率の高さは、よそ目には一高の特色と映っているようだ。一高には県内外の高校から進学がらみでの学校訪問が頻繁だが、そうした場でも、授業補填に関する質問が必ずといっていいほど寄せられると聞いている。

集会での講話も力が入った一つだ。校長が生徒に指導する機会は集会ぐらいいかない。何をテーマに、どんな材料なり段取りなりで話を進めるか、それを見て話をするわけではないが、原稿を作り自分なりに推敲を重ねた。中でも手を換え品を換え話をしたテーマが、一高生が陥る劣等意識の問題だ。一高には各中学からトップクラスが入るが、そうした中でも三百人いれば一番から三百番まで順位がつく。下位が度重なれば自信を失ない、立ち直る機会もなかなかつかめて戦うか、それが私の話の一つの柱だった。

返し訴えたのは「日本一の高校を目指せ」だった。一歩でも二歩でも前進することが目標に近づくことなのだ、ある程度進んだところで「この辺でいいか」と立ち止まってしまうのなかつた。それに、目標は一番高いところに設定しておかなくては、と思った。

その後の一高の十年二十年を見ると、筑波大合格数で日本一になり、さらには東大現役合格数で公立校日本一になるなど、わたしの期待以上の「日本一」が現実のものとなっている。それは取りも直さず生徒諸君と先生方のたゆみない努力の成果にほかならない。

わたしの今時

ゴルフであれパソコンであれ、やはり物には飛びつくほうだが、近ごろクラブには暇を出した。水高(旧制水戸高校)時代に始めていまだに続けているのが俳句。時折「万緑」系の俳誌に出している。目立ちたがり屋で、人をはつとさせるような句を作りたいほうだ。そういう趣向が俳句とは相いれないところがあるのも重々承知はしているが。

略歴

- 一九三二年 つくば市生まれ
- 一九三九年 旧土浦中学校卒(中38回)
- 一九四二年 旧水戸高校卒
- 一九四三年 東京大学経済学部入学
- 一九四五年 陸軍入隊
- 一九四六年 シンガポールにて終戦
- 一九四七年 帰国、東京大学卒
- 一九五〇年 製薬会社入社(のち退社)
- 一九五七年 土浦一高社会科教諭
- 一九六七年 県教育庁教職員第二課
- 一九七二年 県教育庁教育次長
- 一九七四年 土浦一高校長
- 一九八〇年 同立教育会館筑波分館館長
- 一九八六年 同館長退職

卒業生レポート

⑪

放射線のリスク

東北大学医学部教授

小野 哲也

高十八回(昭和四十一年卒)



同窓会諸氏におかれては、放射線の特徴やリスクについてどの位ご存知だろうか。放射線は健康診断などではよく使われるものの「放射線被曝」と聞けば「怖い」と思うのが普通ではないだろうか。しかし、この「怖い」を正當なものにするにはそれなりの理解が不可欠です。現在大学で放射線の生体影響についての研究・教育に携わっている立場から三つの話題を紹介いたします。

7年前の9月30日に東海村で起こったJCO事故は皆さんの記憶にもあることと思います。この時、少量の放射線を被曝した女性がテレビのインタビューを受けて「私の体の中を中性子という丸いものが突き抜けたんだってよ。ほんとに怖いね。」と答えていまし

た。おそらく彼女は被曝について専門家から説明を受け、その時黒板にウランの原子核から丸で表記された中性子が飛び出すこと、その中性子が体を突き抜けたことを図で示されたものと思われる。

中性子の大きさが銃弾よりはずっと小さいことは想像できたであろうが、その粒子が体を突き抜けた穴を作ったというイメージを持たない。出血はしてないから、穴はかなり細いのだろうという推測もできたかもしれない。彼女の恐怖はもっともである。が、しかしである。この「怖い」は正當なものであるか。

よく説明するところである。中性子線は放射線のひとつで高いエネルギーを持っていて生体を構成する分子を破壊する。これにより生体に悪い影響を及ぼすと考えられるが、実は地球上のどこにも放射線は常に存在し、生命の誕生も進化も放射線の存在下で行われてきた。従ってすべての生命体は自身の分子が少々壊されてもそれを修復するだけの能力を備えることによってはじめてこの世

での生存が保障されるようになった。そもそも生体を構成する分子はそれほど強靱ではなく、放射線を受けなくても壊れ易い。この意味からも修復能力は必須である。従って生体分子に少々の傷が生じても何か影響が出るとは考えにくい。事実世界の各地を調べると地中から出てくる放射線量が違うため自然放射線量は地域により異なり、放射線の高い所でも健康影響は見出されていない。これらの事からもJCO事故で少量の被曝をした人達が心配するに値するような健康影響はないと考えた方がよい。少なくとも私が上記の女性の立場ならそう考える。心配することによる心理的なストレスの方が問題になりかねない。良くも悪くも人間は精神状況によって支配を受ける。

二つ目の話題は放射性同位元素についてである。この元素は通常の元素の性質を保っているものの原子核の中から放射線を放出するので元素の生体内での移動を追跡するのに便利であり研究や診断の場ではよく使われる。ある時ひとりの女性研究者がベータ線という放射線を放出するリンの放射線同位元素を用いて研究していたところ、その間に妊娠していることが後から分かった。放射線は奇形を誘発する作用のあることが知られているのでその女性は放射線のせいで妊娠した子が奇形で生まれてくることを恐れて人工中絶をした

という。これは又聞きによるものだがいかにもありそうな話である。これも不完全な知識がもたらす悲劇のひとつである。実は放射線のリンの出す放射線はエネルギーが低く体の中には数ミリメートルしか浸透しない。従ってこのリンをいくら使っても、そこから出る放射線は卵巣や子宮には絶対に届かず、胎児が被曝している可能性はゼロである。従って中絶の必要は全くなかった。ここでは研究者が中途半端な知識をもっていたことが問題になる。

三つ目は近年の研究の話題から。放射線を浴びると癌の発生率が増加することが分かっているが、もし間違って被曝した時、それに気づいてある薬を飲めば癌の発生が抑制されるとしたらどうだろう。このような薬の可能性が少なくとも実験動物では示唆されている。通常マウスやラットという実験動物を飼育する時は餌と水を充分与えて飼育する。この動物に多量の放射線を与えた後一年か二年待つと非照射の動物より多くの癌が生じてくる。むしろマウスでもヒトでも、たとえ被曝しなくても老化すると癌は多発する。この時、放射線照射後動物に与える餌の量を少なくして摂取するカロリーを60%から70%に減らしてやると、ただしカロリー以外の栄養の量は変えない。そうすると癌の発生率が1/3以下にまで激減する。

最近ではこの現象の分子レベルでの解析も進み、カロリー制限により細胞内の代謝が変わり細胞が分裂増殖する体制から外からのストレスに対し耐性を持つように変化するのではないかと考えられている。この解析がさらに進むと、特定の細胞内蛋白質を薬によって制御することによりカロリー制限と同じ効果を得られるようになるのではないかと考えられる。それが実現すれば放射線に対する考え方もかなり変わってくるのではないかと。

因みにカロリー制限食は放射線による癌の誘発を抑えるだけでなく化学発癌剤の作用も減弱させるし、何も処理しない動物に行うと寿命が延びることも分かっている。「腹八分目」ではなく「腹七分目」にするとも元気で長生きするのではないかと推測はこの領域の研究者の多くが考えているが、まだ実証されてはいない。

ここでは放射線のリスクをあげたが、これに限らず専門家と非専門家の知識の乖離は人類の知識が膨大になった現代では不可避である。このような状況ではいろいろな専門領域での情報を必要に応じて迅速に引き出しそれを共有できることが肝要であろう。同窓会が地域の課題を吸い上げ、問題解決に必要な情報を集めてインターネットに掲載するというのも、あるいは有意義かも知れません。

支部だより

茨城県庁支部

茨城県庁進修同窓会は、土浦一高の卒業生であつて茨城県職員となつている者を会員として構成されている。平成十八年六月現在で、一般会員三四二名、特別会員二一名(県議会議員三名、歴代会長九名等)を擁し、職域の支部としては最大規模の一つと思われる。

定例総会は、毎年六月の第二回定例県議会の最終日に水戸市内のホテルで行つている。



現・茨城県庁舎

本年度の総会は、六月十六日に、進修同窓会本部から幡谷祐一會長、水戸支部から幡谷浩史支部長を来賓としてお迎えし、桜井富夫県議(昭和三十三年卒)、足立寛作県議(昭和三十七年卒)の出席をいただくとともに、角田芳夫副知事にも出席いただき、盛大に開催された。

まず、會長大塚(昭和四十一年卒)による開会の挨拶の後、幡谷會長、幡谷支部長、桜井県議、足立県議から、会員各位への激励等の挨拶をいただいた。また、水戸一高卒の角田副知事からは、互いに切磋琢磨しようとのエールをいただき、馬場清康氏(昭和四十二年卒)の音頭により乾杯。

次に、母校の岡崎尚俊教頭先生から、母校の現況等の説明を含めて挨拶をいただき、続いて、今春県庁を退職した諏訪原守氏、高橋恵一氏、田谷英夫氏、堤義雄氏、横山薫氏(いずれも昭和四十年卒)から、県職員時代の思い出や今後

の会員の活躍を期待する旨の挨拶をいただいた。更に今春県庁に入った方々に、今後の抱負等を述べていただいた。

会場内には、県会議員、副知事、教頭先生、各退職者を中心にいくつものグループができ、それぞれ母校のこと、仕事や趣味等の話題に花を咲かせ、親交を深めた。

最後に、池田正明氏(昭和六十一年卒)の音頭により、出席者全員で校歌を斉唱し、保山剛一氏(昭和四十三年卒)の中締めにより解散した。

県行政を進めるに当たっては関係部局の連携が重要であり、土浦一高の卒業者が定期的に集い、親交を暖めることは、県行政にとつても大いに得るところがあると自負している。今後とも県庁支部の更なる発展に向けて努力してまいりたい。

(県庁進修同窓會長 大塚輝一郎)

常陽亀城会

去る九月二日(土)、第三十三回常陽亀城会総会が開催されました。常陽亀城会はその名の通り、土浦一高出身の常陽銀行役職員で構成する同窓会組織です。昭和四十六年に結成され、現在では会員百四十名を数える、行内でも有数の同窓会組織です。今回の総会は市内のホテルロイヤルレイク土浦にて会員六十四名の参加のもと、盛大に開催しました。



今年には総会に先立つて母校を訪問、旧校舎前で記念撮影を行った

後、旧校舎内を見学させていただきました。懐かしい建物と貴重な展示物を拝見しながら、高校時代の思い出を辿るとともに、当時と現在の学校の変化に、時の流れを大いに実感しました。

総会では、母校の村松校長先生と、進修同窓会の横田副會長を来賓にお迎えし、母校や同窓会の近況についてお話をいただきました。在学時代に村松先生にご指導いただいた会員もおり、大いに旧交を温めました。

常陽亀城会は各地の本支店に勤務する一高出身者が集まって情報交換や近況報告を行う貴重な機会です。会員交流のため、これから毎年開催していく予定です。

(常陽亀城會會長 江橋上)

平成十九年度 進修同窓会総会の御案内

- 次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。
- 一、期日 平成十九年四月八日(日) 午後一時
 - 二、会場 土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

- 卒業五十周年 高九回 定七回
- 卒業四十周年 高十九回 定十七回
- 卒業二十五周年 高三十四回 定三十二回

一般会員・周年記念会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。

尚 総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会(懇親会)を開催いたします。

お知らせ

土浦一高OBゴルフ会 第二回大会報告

土浦一高卒業の迎還暦者による土浦一高OBゴルフ会の第二回ゴルフ大会が平成十八年十月二十日千代田GCに於いて盛大に催された。今回参加者は中学四十八回卒の海老原雄一氏を筆頭に四十年高卒までの百三名であった。ちなみに第一回は昨年十月二十一日参加者六十四名で霞ヶ浦国際GCにて行われた。今回も天候にも恵まれ、同窓のよしみもあって和気藹々のとても和やかな会であった。

競技は新リペア方式で行われ、後のパーティで表彰式と懇談会が行われた。成績は団体優勝三十八年卒グループ、個人優勝三十一年卒進士義正氏、準優勝三十二年卒古徳利光氏、三位三十五年卒中井川功氏、四位三十八年卒薫科登氏で、ベストスコアは三十七年卒諸岡章氏グロス72であった。その他の入賞は5飛びの二十名及びBBでさらにドラゴン、ニアピン、くじ引き等で、賞品が盛りだくさんの授賞式であった。

今回は協賛として海老原雄一氏、株式会社田島屋田嶋為太郎氏、進修同窓会東京支部長大野金一氏、有限会社ナブト中村信秀、鉄竜山小林将城氏、菊田スポーツ店より多くの賞品が提供された。

当会は年次をまたいだ大会としての柔道部OBの発案で、その後有志による幹事が集い発足した。

開催規模の都合もあり、先ずは還暦者以上の皆様呼びかけて開催することにした。今後の運営についての話し合いで、特に運営の要としての会長を引き続き田嶋為太郎氏にお骨折り願うことを満場一致で決議した。今回、本会の目的である一高シニアOBの懇親は、参加の皆様及び幹事方々のご好意とご協力により十分達成されたようです。次回第三回は新たに四十一年卒OBを加え来年十月吉日にさらに盛大に催すことが全会一致で決まりましたので引き続き皆様の御参加を期待します。

(第8回卒・中村 信秀)



ゴルフ会入賞者

同窓会名簿の発行について

土浦一高は平成十九年に創立百十周年を迎えます。それに伴って進修同窓会では、規約により、新しい同窓会名簿を発行することになっています。過日、株式会社サラトと名簿発行に関する契約を結びました。

主な内容は次の通りです。

- 一、名簿の掲載事項及び住所等の調査方法は前回に準ずる。
- 二、名簿は平成十九年八月に発行する。
- 三、名簿の販売価格は送料等を含め四千円とする。
- 四、名簿の販売方法は、業者から送付されている会員名簿作成用確認はがきの返信を利用した注文販売を原則とする。
- 五、広告募集も名簿販売方法に準ずる。ただし前回応募した企業等には、別途、応募用紙等を送付する。
- 六、個人情報保護法に配慮する。例えば、名簿の配付、販売は、会員のみとする。
- 七、応募広告の減少が予測されるため、賛助金を募る。(賛助金、一万円で名簿一冊と広告欄末に協力者名を掲載する)

これらの内一〜五はほぼ前回通りで、六、七は新たに加わりました。

この契約に基づき、年明けから調査、資料収集、掲載内容の変更点検(特に市町村合併、人事異動

等)、内容構成と名簿作成作業が本格化しますが、同窓会本部では編集委員会を設置して、業者と協力、連携しながら、作業を進めていくことになっています。

同窓会名簿は、同窓会本部または支部と会員の連絡、会員相互の交流に必要不可欠なものです。内容の充実した名簿の発行を願っております。

お手元に送付されている会員名簿作成用確認はがきにご回答くださるようご理解、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

資料提供のお願いと御礼

日本館活用委員会

求「進修」37号

進修会発行の雑誌「進修」は

本校の歴史をたどる上で第一級の資料ですが、全五十冊中37号だけが欠けています。昭和八年か九年に発行されているはずですが、当時旧土浦中に在籍されたお身内をお持ちの方は、書棚等をお探しいただけないでしょうか。B5判より少し小さめ、表紙は「進修」です。ございましたら一高宛ご連絡ください。第二と第四火曜日が旧本館活用委員会の活動日です。

また、「進修」37号ばかりでなく、一高や一高卒業生に関する資料であれば何によらず広くご提供を募っております。よろしくお願いたします。

資料ご提供御礼

十六年度以降のこの三年だけでも、多くの方々から、それぞれ貴重な資料のご提供をいただきました。厚く御礼申し上げます。

す。いずれ会報紙面を借りて概況なりとご報告したいと考えておりますが、今回はその中から、宮司彰氏(高14回)ご提供の一部をご紹介しますさせていただきます。

氏からはこれまで数次にわたりご寄贈いただいております。その資料の範囲も数量も多大なものがありませんが、中でも下村千秋、高田保、そして本校野球に関する資料がきわめて豊富です。

下村千秋(中12)は、その代表作となった「街のルンペン」で昭和初期の流行作家の仲間入りです。この小説は映画にもなり、ルンペン(浮浪者の意)は時代の流行語にもなったのです。

高田保はその千秋と土浦中学の同窓ですが、戦後、新聞連載のコラム「ぶらりひょうたん」で昭和二十年代半ばの文壇の寵児となります。政治から市井の出来事や身辺雑事まで幅広くとりあげ、該博な雑学をからませながら、辛口の批評を感性豊かなユーモアとウィットでくるめた軽妙な筆致で広く読者の喝采を博しました。

単行本、作品掲載誌、自筆原稿等を含め、千秋関係資料が四十八点、同じく保関係資料が四十二点にもなります。

本校野球に関する資料で特筆すべきものに「甲子園への道」と題されたスクラップブックがあります。昭和三十三年本校野球部甲子園出場の際の予選から甲子園の熱戦までを、六百点を超す切り抜きで九冊に集大成した力作です。

右の資料は他の寄贈資料と併せて旧本館展示室に展示してあります。ご来館の節はどうぞご覧ください。

母校だより

―第五十九回一高祭― 一高祭を終えて

一高祭実行委員長 沼尻 祐未

六月三・四日、第五十九回目となる一高祭が開催されました。今年には晴天に恵まれ、たくさんのお客様にお越しいただくことができ、大成功のうちに幕を閉じました。まずこの場を借りて、ご指導をくださった先生方、ご協力いただいたご父兄の皆様、御礼申し上げます。そして陰の立役者となって尽力してくれた各委員長始め、実行委員のみなさんに感謝の意を表したいと思います。

さて、今年一高祭は「源々あなたのルーツはなんですか?」というテーマの下、実施されました。ここには、自分が歩んできた道を今一度振り返り、今の自分自身を見つめ直してみようか、という提言が込められています。一人一人のカラーを再発見し、活かして行こう―そのテーマ通り、実に様々なカラーで彩られた一高祭に仕上がりました。その中から少しだけ、ご紹介したいと思います。

まず、今年一番皆さんの目を驚かせた「ゲート」。今年は難破船をモチーフとし、壮大でドラマティックな作品に仕上がりました。ステンドグラスを用いた絶妙な採光で、嵐の後に雲間から差し込む光を思わせる幻想的な面を見せつつ、ごつごつとした縄で囲まれたくすんだ黒の船体は、海賊のそれを思い起こさせるような豪快な面を持ち合わせた、すばらしい作品でした。



一高祭

催されました。特にMスクウェアでは、たった7分の寸劇で、何度も何度も笑い転げてしまうような飛び切りユーモアに溢れた作品も多く、甲乙つけがたいものばかりでした。クラス企画では、ダヴィンチコードの世界をそのまま再現して見せたミステリアスな迷宮迷路や、身も凍るほどの恐怖の連続のお化け屋敷など、大盛況で、たいへんな賑わいでした。

―高オリンピックを終えて―
一高オリンピック実行委員長 柴沼 潤

最初の会議の日、自分は公欠で学校を休んだ。そしてその晩、あるメールが届いたのである。一委員長柴沼君になったから。そんなバカなっ! それでも断る余地はなく、こんな経験をしてみるのもよいだろうと自分に言い聞かせ、委員長を引き受けることとなった。



一高オリンピック

そしてその翌日から一高オリンピックに向けての準備が始まった。しかしこれが予想以上に忙しく、不慣れな自分は開始早々委員長を引き受けたことを後悔した。だが、ただ辛いだけではなかった。悪戦苦闘している自分に、周りからは「何か手伝うことある?」「ここはこうした方がいいんじゃない?」そんな声が向けられた。各部の代表者も決して片手間に参加するわけではなく、頼まれた仕事は快く引き受けてくれた。審判に関しても事前の確認を怠ることなく、部全体が協力してくれているのを感じた。そして迎えた当日、今年は何日

こそ去年と同じになったが、ルールに多少の変更を加える形をとった。不満の声もあった。楽しみにしていたオリンピックで、満足いく形を取りきれなかったことは非常に申し訳ないと思う。それでも各会場では、大きな声援が飛び交い、歓喜の声が響き渡る盛況ぶり、盛り上がりを感じることができたのはとてもよかった。また最後の学年リレーでは、3年生がコスプレをして走るという企画を考えつき、これに会場は大いに沸いた。その後、予定時刻を過ぎることなく閉会式が行われ、一高オリンピックは幕を閉じた。

今回の一高オリンピックを通して、決められたルールの中で全力を出し切り、互いに喜びを分かち合う、そんな一高生の良さを感じた気がした。そして今、自分は、最高の仲間と共に実行委員長を務められたことを誇りに思っている。

つくりあげてきたもの

第38回歩く会実行委員長 永井麻里

二つの季節を経て「つくりあげてきたもの」がたちになったその日は、天気にも恵まれた。

六月の中旬、第38回歩く会実行委員会が結成された。それから約四ヶ月の間、実行委員は時間を惜しんでよく活動していた。委員長として委員を支えなければならぬ私が委員に支えられていたことに気づくのに、あまり時間はかからなかった。当日までの時間が近づいて来るにつれて、委員の間の距離も近づいていくことにも私は気づいていた。この場を借りて実行委員、そして小松崎先生をはじめとする関係の先生方にお礼申し



歩く会

上げる次第です。今年は何初めての試みが二つあった。一つめは実行委員が共通のTシャツを購入したこと。第38回、委員38名。これらをふまえて、水色の布地に黄色の文字で背中に38と数字が描かれているものであった。当日委員はこれを着て仕事にあたった。

二つめは山の頂にスタンプを押す場所を設けたこと。スタンプはこの日のためにオリジナルで作ったもので、記念にと遊び心を交えたものであった。

これらの試みが、来年以降継承されるかは定かではない。いずれにせよ、先代が残した功績はマニユアルにすぎず、常に実行委員の活動は常に白地図の状態から始めなくてはならないようなものだ。

道は時々刻々と姿を変える。この行事もそれに伴って毎年何らかの変化を見せることだろう。しかし、道がある限り、この行事が続いてゆくことを切に願っている。

職員室だより

翼工房(美術室)から

小 牧 幹

「向こうの教室で知識を学べ、そして、ここでは知恵を掘り起こせ。どんなに広い空でも、両方の翼を均等に持たなくては思うところに自由には飛べまい。まして、美しいものなど見えはしない。未来に可能性あるきみたちの、ここは翼工房だ。」

今年の生徒たちも、入口ドアに貼られたこの翼工房メッセージを、どうやら意識しはじめたようです。

よい子が親を殺すなどといわれ、世界中でも例のない嫌な時代の日本ですが、本校の生徒たちの心は健全です。

ホームページのバーチャル美術館、または、常陽新聞に毎週連載中の「美は人をつくるー土浦一高・翼工房の試みー」の作品及び完成後作文をぜひご覧ください。

一枚の作品を画くと言う、長く苦しい自己との戦いの半年を通して、生徒たちが少しずつ精神的に成長していく過程が見えてきます。

百年という伝統校に似合う、骨太な人づくりのために、凛として音楽そして美術は健在です。

定時制から

「食育」について

学校栄養士 染谷 順子

食育基本法が平成十七年六月十日に成立し、茨城県でも子供達が健全な心と身体を培い、豊かな人間性を持ち、「食」を通して生きる力を育む「食育」が進められています。定時制に於いても本年度より食育の時間として毎週月曜日の給食の時間に、食の大切さ、食べ物栄養や効能、日本や世界の郷土料理などについて話をさせてもらっています。

昼間はアルバイトなどで働き、夜は学校で勉強や部活動の定時制の生徒の中には、三食きちんと決まった時間に食事をするのが困難な人や、さまざまな事情から一日の食事が唯一給食のみという生徒もいるのが現状です。県が行なった食に関する調査では、全定時に朝食の欠食率の増加という結果が出ています。

今食べている材料がどこで作られているか、豊かな実りのある茨城県産食材の地産地消など、身近なところから関心が持てる題材を見つけ、給食の間の少しの時間に耳を傾け、学校給食ばかりでなくこれから創っていくだろう新しい生活に向けて知識や興味を持ってもらいたいと思っています。そして、幅広い年齢層の定時制のみんなに喜ばれる給食を作って行きたいです。

部活動だより

サッカー部

二年 萩谷 圭亮

十三年間土浦一高サッカー部を率いてきた中江先生がいなくなってきたら半年。加納監督、井川先生、三木コーチという新しい顔触れで新生サッカー部は全国大会を目標に部員三十六名、マネージャー五名で日夜、練習に励んでいます。

今年度、先輩方は関東大会茨城県予選ベスト4、インターハイ茨城県予選ベスト8という結果を残して、引退されました。この結果は過去の成績の中でもすばらしく、これを超えるべく、「自分に厳しく、他人に厳しく」をモットーにしています。

私たちは他の学校とは違い、勉強とサッカーを両立させなければいけなく、テストも多いのでどうしても練習時間が限られてしまいます。そんな中、練習の質を高め、切り替えを早くし、試行錯誤を繰り返しながら成長していきたくです。現在は、新チームでの最初の公式戦である全国高校サッカー選手権茨城県予選にむけて頑張っています。

昨年より私たちサッカー部のHPができました。ここでは試合の結果、予定などを載せているので是非一度御覧ください。また毎年、年初には初戦会と称して、サッカー部OBの集まる場を設けています。ここではOB戦などを行っているので、サッカー部のOB、OGに関わらず、お時間があるりましたらそちらのほうへも是非お越しください。

硬式野球部

二年 関本 幸樹

自分たちの先輩は今夏、ベスト16という快挙を成し遂げ引退していきました。そして今、新たなスタートをきり、先輩たちを越そうと、夏ベスト8にむけて練習に励んでいます。

現在、部員・マネージャー合わせて四一名と、今までになく多く、山越先生、酒井先生、吉井先生、井上先生の四人の先生方に毎日熱い指導を受けています。

一高野球部は毎年仲が良く、元気もよくて、練習・試合はいつも雰囲気よくやっています。自分たちも少しずつ雰囲気など良くなったかと思えます。

また、自分たちは野球を通して、社会にでて生きていく上で大切なこと、例えばあいさつことや返事のことなど、多くのことを学んでいます。この野球部で学んだことを大事にし、この野球部にいることを誇りに、この野球部目標に向かって進みたいのです。

一高野球部は多くの方々を支えられて成り立っています。山越先生をはじめとする諸先生方、陰ながら支援して下さっているOBの方々、また両親を初め多くの人への感謝の気持ちを胸に、これから練習に励んでいきます。

秋季大会は地区予選で敗退。しかし、一冬を越し、団結力のあつるいいチームとなって、またあの夏の舞台にもどってきます。ぜひ来年の夏の大会を見に来て下さい！感動を与えられる試合ができるよう、今日も明日も、一日一日頑張っていきたいです。

応援指導部

二年 柴沼 肇

現在、応援部は創立四十三年目と、長い歴史と伝統を積んできました。こうして存続できたのも、長年指導し、そして見守ってくださった多くの先輩方のおかげです。部員数は二年生一人、一年生五人の計六人と、かなり少ない状況ですが、それでも来年の夏の大会の応援のため、日々練習に励んでいます。

今年の夏、野球部は大会ベスト十六という、すばらしい成績を残しました。中には白熱した投手戦の末、延長十回にホームランで勝ち越した試合もありました。それから数々の試合の中で、第四十二代指導部員、応援委員は皆、成長したと思います。それは身体面だけでなく、精神面においても。

一高祭が終わった六月上旬から、テスト期間を挟んで七月上旬までという、例年通りの短い期間の練習でしたが、今年の応援はよりすばらしいものになりました。

応援とは、自分たち応援部と学校の生徒とが一体となって応援してこそ、成しえるものだと思う。

第四十二代の先輩方は、今年の夏それを見事に成し遂げて、応援大賞を受賞しました。新しくスタートした我々第四十三代もそれに向けて、また「寛雅・至誠・武勇」という部訓の下、頑張っていこうと思います。

平成十八年度入試報告

公立校の気概を持って

文武両道で難関大めざす

進路指導部長 門井 了

平成十八年度入試は、新課程初年度の入試ということで注目されました。教育課程の変わり目のゼンター試験はこれまで易化する傾向がありましたが、文系・理系とも900点満点で平均が30点前後上昇しました。本校生の平均点も、文系(6教科7科目)が724・5点、理系(5教科7科目)が736・4点と、前年に比べて大幅にアップしました。結果、強気の出願で、二次力の有無が明暗を分けた入試になりました。

国立難関大及び医学部医学科志向は今年度も顕著でした。新卒生に限ると、北大、東北大、東大、東工大、一橋大、大阪大、京都大、それに地元筑波大と国立大医学科の実受験者数は240名で、これは国立大実受験者総数の88・9%にもあたりません。合格者は84名で、国立大合格者115名の73%にとどまっています。

新卒・既卒合わせた国立大合格者数を大学別に前年度と比較してみると、増加が目立ったのが、北大8名(プラス4)、千葉大17名(同7)、大阪大7名(同5)、逆に減らしたのが、東北大22名(マイナス7)、筑波大39名(同7)、東大21名(同5)、一橋大4名(同7)、横浜国大0名(同9)となっています。国立大全体では、177名の合格で、前年比22名減でした。新卒生が合格した国立大学数は四年連続25大学でした。公立大では、12名が合格(前年比マイナス2名)、地元県立医療大

の合格者はありませんでした。東大の実験結果は、実受験者数で、文系36名(新卒31名、理系38名(同24名)の合わせて74名(同55名)が挑戦し、文系9名(同5名)、理系12名(同10名)の合計21名(同15名)が合格しました。そのうち後期合格者は文科一類の既卒生1名でした。最後までねばり強く辛抱した結果です。

医学部は、国立大学医学部医学科に限定すると、21名(昨年16名)が合格、新卒生では延べ43名(昨年40名)が受験し、筑波大に3名、群馬大、長崎大に各2名、山形大、信州大、宮崎大の各大学に1名ずつ、計10名(昨年11名)が合格しました。昨年に続いて二桁の合格者を出したのは立派です。

私立大の総受験者数(新卒生・過年度卒生の延べ合計数)は1312名(昨年1372名)、合格者数は671名(昨年707名)、新卒生に限ると、受験者数が前年と同数の871名、合格者数では28名減の335名でした。例年同様、慶応大、中央大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大で多くの合格者を出しています。

新卒生の進学率は57・5%(昨年64・4%)でした。やはり、国立大の合格者数が昨年より25名少なかつたことが数字に直結しているようです。難関大志向は続くでしょうから、進学率が上がるためには、低学年からの授業を軸に据えた学力の増進が望まれます。本校は受験に特化したカリキュラムをとらず、文武両道を奨励しております。と申しますのも、生徒の長い将来を見据えての全人教育を旨としているからであります。公立高校としての自信と誇りを持って邁進していく所存であります。

平成18年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

大 学	合格者	新 卒
旭川医科大	2	0
北海道大	8	4
弘前大	1	0
岩手大	1	0
東北大	22	16
山形大	1	1
茨城大	9	9
筑波大	39	29
群馬大	3	2
埼玉大	1	1
千葉大	17	9
お茶の水大	6	4
東京大	21	15
東京医歯大	3	0
東京外語大	4	4
東京学芸大	3	1
東京芸大	1	1
東工大	5	3
東京農工大	1	0
一橋大	4	2
新潟大	2	0
山梨大	2	0
信州大	1	1

大 学	合格者	新 卒
名古屋大	1	1
京都大	4	1
大阪大	7	4
神戸大	1	1
奈良女子大	1	1
岡山大	1	1
徳島大	1	1
愛媛大	1	0
長崎大	2	2
宮崎大	1	1
国立大計	177	115
(医学科)	(21)	(10)
首都大東京	5	4
横浜市立大	1	0
静岡県立大	2	1
岐阜薬科大	2	1
大阪府立大	1	0
奈良県立医科	1	0
公立大計	12	6
国公立大計	189	121

大 学	合格者	新 卒
青山学院大	12	10
学習院大	8	7
慶応大	53	26
国際基督大	4	1
上智大	17	12
中央大	39	23
津田塾大	4	4
東京女子大	7	6
日本女子大	5	4
東京理科大	106	48
明治大	74	40
立教大	38	23
早稲田大	87	46
法政大	21	13
北里大	9	0
芝浦工大	18	11
日本大	18	7
同志社大	4	2
立命館大	6	3
産業医大	1	0
その他	140	49
私立大計	671	335
合格者総数	860	456

平成17年度 進修同窓会決算書

収入額 一金 12,963,199円也
支出額 一金 10,540,245円也
差引残高 一金 2,422,954円也 (平成18年度へ繰越)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 比較増減, 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 寄付金, 雑収入, 合計, and 寄付者名.

【支出】

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 残額, 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業60,50,40,25周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 予備費, 合計.

上記のとおり決算しました。

平成18年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成18年3月31日

監事 梅澤 正之進 印
監事 田嶋 栄吉 印

平成18年度 進修同窓会予算書

収入額 一金 13,298,000円也
支出額 一金 13,298,000円也
差引残高 一金 0円也

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減, 備考. Rows include 繰越金, 終身会費, 年会費, 入会金, 雑収入, 合計.

【支出】

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 前年度予算額, 比較増減, 備考. Rows include 総会補助, 会報発行費, 通信費, 卒業記念品費, 卒業60,50,40,25周年記念品費, 会議費, 支部連絡費, 生徒奨励費, 生徒活動補助費, 別途積立金, 慶弔費, 事務局費, 旧本館活用事業費, 予備費, 合計.

※項目間の流用を認める。

旧本館活用委員会より

旧本館活用委員会が発足してまもなく丸5年になります。毎月2回(第二・第四水曜日)の委員会はほとんどかかさず開かれ、活動しています。委員会のメンバーは十数名おりますが、実際の活動に参加しているのは数名です。おもな活動内容は、旧本館の資料展示室の整備、資料のデータベース化、資料の保存及び資料の収集などです。それに毎月第二土曜日の旧本館一般公開も委員会の重要な仕事のひとつになっていきます。

旧本館公開については、来年度から公開日を増やす方向を打ち出しました。つまり、これまで4〜6月は第二土曜日ではないPTA総会など学校の行事日に合わせて公開し、7月以降は第二土曜日という形をとってまいりました。これでは分かりにくい面があります。

したので、これを次のように改めました。旧本館一般公開は年間を通して毎月第二土曜日とする。それに臨時公開日として4月は月初めのお花見時の土・日曜日、同窓会総会日(6月)が加わり、5月はPTA総会日、6月は一高祭期間も開館する。なお11月の学校公開日も加わるようになります。また、一般公開とは別に事前に申し込みがあった団体などの見学要請には、支障のない限り出来るだけ曜日に関係なく応じたいと思います。

会費納入のご協力とお願い

平成十七年度の会費納入状況は、平成十八年三月末現在、二、六八四名の皆様か

ら、八、八六八、〇〇〇円を頂きました。今年度も納入して頂きたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

ある秋天の旧本館公開日。いた果外かららしい来館者と案内係の会話。この楠は、大体何年ぐらになるものですか。[明治三十九(一九〇六)年の秋に、真鍋新地の植木屋から苗木を買って植えたという記録が残っています。それから百年になります。]

だき、厚く御礼申し上げます。今年度も進修同窓会をよろしくお願ひいたします。進修同窓会会報第63号 発行日 平成十八年十二月一日

会報編集委員会 編集委員長

木曾根 大 上飯谷 堀 宇野 池田 鈴 菅 倉 田 木 谷

校 内

木曾根 大 上飯谷 堀 宇野 池田 鈴 菅 倉 田 木 谷 博 淳 憲 仁 志 良 幹 幸 宏 豊 夫 一 彦 郎 郎 博 雄 弘 夫 夫 亮

土浦一高 電話 〇二九一八二一〇一三七 FAX 〇二九一八二一〇一三五二 ホームページアドレス http://www.tsuchunat-h.ed.jp